

丸山敏雄の成し遂げたこと

—三千年間の暗雲、「三世思想」の覆いを取り払う—

高橋徹（倫理研究所専門研究員）

徳福一致、最高至上善の世界が、この地上にうち開けて来た。

否、人類の発生と共に、人生は至善の至境であった。

ただ暗雲におおわれて、眠っていた。正に人類の黎明はおとずれた。(丸山敏雄)

はじめに

筆者は、2001年頃から倫理研究所の創立者で社会教育家の丸山敏雄（以下、敏雄と表記する）の著作を読みはじめた。敏雄は著作の中で、道徳と幸福が完全に一致する倫理を発見したこと、および「三世思想」が無用の長物になったという意味のことを繰り返し述べている。

筆者はこうした敏雄の文章を読んで、「徳福一致の倫理」の発見が、なぜ「三世思想」が無用のものにするのか、その理由というか関係がよく理解できなかった。頭に〈もや〉がかかっているような状態だったのである。文章としては、敏雄の著作の多くにその論拠が散見されるのだが、自分の中で納得のいく形で咀嚼することも、消化することもできなかったのだ（これは単純に筆者の読解力のなさ、理解力不足の問題である）。

それで2009年頃から、もう一度、三世思想についておさらいし、特に敏雄の代表的な著作である『実験倫理学大系』と『純粹倫理原論』を中心にして、該当箇所を何度も読み直した。その結果、「丸山敏雄の成し遂げたことは何か？」というみずから立てた問いの答えが、やっと少しだが、うっすらと見えしてきた。頭の中の〈もや〉が晴れてきたのである。長年、純粹倫理の研究をしてきた方々にとってはすでに当たり前のことかもしれないが、この筆者のささやかな体験を元に、敏雄の見解を整理し、なぜ三世思想が不要なのかを順序立てて説明したい。

なお、三世思想と、いわゆる「生まれ変わり」とか「輪廻転生」を一緒にして考える向きもあるかもしれないが、「生まれ変わり」や「輪廻転生」は、前世や来世とは（関連はあるものの）別な概念であることに注意を促したい。本論では紙幅の関係もあって、「徳福一致の倫理」の成り立ちと三世思想との関わりに終始し、「生まれ変わり」や「輪廻転生」については取り上げないことをご了承いただきたい。